

## 1.1.2.6-02

---

「を」と「が」の使い分け

## 1.1.2.6-02\_「を」と「が」の使い分け\_ナレッジ

---



「が」:

ある命題が、ある主体に対して成り立つものです。

「願望・可能」のように、頭の中で考え、口で言っているだけですむものは、「が」をとる。  
状況とか状態について記述する場合は。



「を」:

ある動作の作用対象です。

「行為・意思」のように、行動するもの、あるいは行動に結びつくものは、「を」をとる。  
行為について記述する場合は。

## 1.1.2.6-02\_「を」と「が」の使い分け\_ナレッジと応用例

### ☞ 「～を／が……たい」の場合

「動詞＋たい」という派生動詞にも「を」と「が」の両方が用いられる場合がある。  
その意味構造上の違いは次のように区別される。

#### 例文

- a. 水が飲みたい。→ [水が] + [飲みたい]
- b. 水を飲みたい。→ [水を飲み] + 「たい」

⇒ (a) は生理的欲求を表し、(b) は主体の能動的希望を表す

### ☞ 「～を／が…できる」の場合

対象を表す「～が」は、属性主、当事者、対象など複数の役割を果たしているが、  
具体的にどの 役割を果たすかは、置かれた意味構造で決められる場合が多い。

#### 例文

- a. この酒は(が) (まずくて) 飲めない。(属性陳述、酒が＝属性持ち主)
- b. 彼は未成年で酒が(を) 飲めない。(状態陳述、酒が＝当事者)
- c. もっと酒を(が) 飲めるようにしたい。(行為陳述、酒を＝被動者)

⇒ (a) は「酒」に関する属性陳述なので、「～を」は使えない。

(b) は動作主側の状態を説明しているので、「が／を」の両方が使えるが、主体の能動的関与の意味あい弱いので、「が」が選ばれる場合がやや多いようである。

(c) は、主体の能動的な関与を表しているので、「～を」が使われるのが一般的である。

## 1.1.2.6-02\_「を」と「が」の使い分け\_ナレッジと応用例

### 「～を／が…である」の場合

「…である」構文も「を」と「が」の両方を用いることが可能である。

#### 例文

- a. この自動車は(が)もう直してある。(行為の結果)
- b. 明日使えるように、もう自動車を直してある。(行為の進行状況)

⇒ (a)は動作の結果を表し、「～が」はその当事者に当たる。

(b)は行為の進行状況を表し、「～を」はその対象を表している。

後者は主体の能動的関与を表しているので、主体をつけ加えることができる。

#### 例文

- a. 本を手に入れるために、(私は)そのことをもう友だちに頼んである。
- b. 今日はお客が来るので、(家内は)ビールを3本買ってある。
- c. そのことは、(彼は)もうあの人には言っている。

⇒ 上の動詞は、基本的に意志動詞なので、主体の能動的関与を表す動詞にのみ「を」格が与えられるということも考えられる。

## 1.1.2.6-02\_「を」と「が」の使い分け\_ナレッジと応用例



### 受身文の場合

#### 例文

- a. 彼の息子は(が)殺された。息子＝主題、主格、状態の持ち主、当事者
- b. 彼は(が)、息子を殺された。彼＝主題、主格、状態の持ち主、息子を＝被動者
- c. 彼は(?が)、息子が殺された。彼＝主題、状態の持ち主、息子が＝当事者

⇒ (a)の「彼の息子」は、主格、状態の持ち主と当事者など複数の役割を一身に担っている。

(b)の「彼」は、被害状態の持ち主ではあるが、殺された被動者ではない。「息子を殺された」は非自立の事象として、「彼」の直接関与下で成り立っている。それに対して、

(c)の「彼」は被害状態の持ち主であるが、「息子が殺された」は自立した事象構造として「彼」とは間接的な関与関係に結ばれている。